

勝鬘經一乘思想と法華經 藥草喻品の關係について

龍村 龍平

この小論は、印度學仏教學研究第二十四卷第一号の拙稿、「勝鬘經一乘思想の一視点」と関連を持つものである。したがつて、両論文を一貫したものととして理解していただきたいと思う。

この小論では、先の論文で提示した勝鬘經一乘思想の問題点に重要な関連を持つものとして、法華經藥草喻品に説かれている一乘思想について述べてみたいと思う。

私は、先の論考で、勝鬘經一乘章の冒頭に、一乘思想に於ける注目すべき經説が述べられているということを指摘した。

その注目すべき經説とは、普通一般に一乘思想という場合、一乘と三乘との關係は、差別の三乘が平等の一乘に入るといふのが、基本的な構造であるのに、平等の一乘から差別の三乘が出生してきたというものである。

つまり、三乘から一乘へという順序が、一乘から三乘へという逆の順序で説かれているということである。

さて、これと同意義を有する説き方が、法華經藥草喻品に於ても、為されていることについて述べてみたいと思う。

法華經藥草喻品は、一乘思想を中心的課題として説き進める法華經に於て、序品、方便品、譬喻品、信解品に続いて説かれる品であ

る。それは原始八品（法華經の原初的、基本的な思想を説く部分）の一部分という位置を占める。

つまりそこでは、一乘思想の基本的問題が説かれているのである。法華經の基本的な構造については、既に十分に研究されている。つまり、法華經二十八品の基本的な部分は、方便品一品の中に集約されているのである。

方便品以下の諸品は、方便品の思想を別な形で、いろいろな角度から表現しようとしたものである。そして、重要なことは、少くとも原始八品という前半部分に於ては、それぞれの品が、方便品を中心として、一乘思想の必要不可欠な基本問題を、それぞれに最も適切な表現でもつて説いているということである。

藥草喻品の經説もそういう観点から見るべきである。

ここでは、釈迦の述成という形で、三草二木の譬でもつて、一乘思想が説き進められる。釈迦の述成、つまり、仏の説法に対して、仏弟子たる声聞が自己の理解を述べる領解に対して、仏が是認して再説補足される説き方でもつて説き進められるということは注目に値する。このことは、三草二木の譬の基本的な構造と深い関連を持つ。

さて、三草二木の譬は、大麥有名なものであるが、要旨は次の如くである。（經文省略）

密雲が一時に雨を降らすとき、大きな木も小さな草も、それぞれ、雨の潤いを平等に受けて、それぞれ自分なりに生長して、種々の花を咲かせ果を実らせる。

このことは仏が一味平等なる法を説かれるとき、人々がその力量相応に法を聞いて、次第に道へ入っていくのと同様である。

簡単に述べると以上のようなことであるが、ここで注目すべきことは、この説き方に依ると、根本の平等なる一から、種々なる差別を生ずるというように受け取れるということである。

さて、ここで三草二木というのを、仏道修行者に当てはめると、藥草喩品の偈頌によると、小草は人天、中草は声聞緣覺、上草、小樹、大樹は菩薩ということになる。

つまり、この三草二木の譬というものは、根本平等なる一乗から、人・天、声聞・緣覺、菩薩の四乗、もしくは五乗の差別を生ずるということが説かれていくわけである。

勝鬘經一乗章の冒頭と、法華經藥草喩品の三草二木の譬のどちらも、表現の方法は違うが、同じ趣旨のことを説いているということは、この考え方が、一乗思想に於ける重大な要点であることを示しているのではないだろうか。

さて、勝鬘經は、一乗思想を理論的、論理的に表現しようとして説かれた經典である。一方、法華經は一乗思想を、文学的に表現しようとして説かれた經典である。

したがって、勝鬘經の一乗章に、一乗より三乗を出生するということが説かれたのは、そのことが一乗思想の中心的な論理であるということを示したからだというふうに解釈すると理解しやすいが、法華經に於ても同様のことが説かれているというのは、どのように解釈、理解したらよいのであろうか。

法華經は文学的に一乗思想を説いた經典である。したがって、その經説の中心は譬喩、たとえ話である。譬喩というものは文学的である。創作であるといえる。少くとも、法華經の譬喩のほとんどがそうである。火宅三車の喩、長者窮子の喩、宝所化城の喩、皆同

様である。しかし、この雲雨の喩、三草二木の喩の場合は、少し他と異なっている。これは、創作文学というより、厳正なる事実、自然の原理、真理である。動かし難い真実の姿である。創作的な譬喩と呼ぶのは適當でないように思われる。

さらに注目すべきことは、先に述べたように、この譬喩が仏の述成、釈迦の述成という形をもつて説かれることである。

ここで考えられることは、この部分の法華經の説き方は、勝鬘經の理論的な説き方と同じ基盤の上に立っているのではないかということである。一乗から三乗が出生するという論理を最も明確な形で、經典の聞き手、読者に理解させるための共通の基盤の上に立っているのではないかということである。

釈迦の真意は、すべての人を成仏させる、つまり唯一乗のみではあるが、しかし三乗もまた一乗に入らせるための釈迦の真意より出た真実の一部としての方便である、三乗も一乗と同様に、仏の教として不可欠であつたということを言いたいために、釈迦の述成という形式を採用して、その形式に加えて、勝鬘經の理論の説き方と結局同等の説得力を持ち得る、創作的譬喩ではないところの、絶対的な自然原理としての三草二木の譬を説くところに、この藥草喩品の一乗思想の基本的課題があるといえるのではないだろうか。

紙数の都合で、必ずしも意を尽くせないが、この一乗思想の考え方の意味するところについては、一番最初に述べたところの論文を見ていただければと思う。(細註省略)